ほんとうにあったお話

がんばれ！盲導犬サーブ

手島悠介・文
清水勝・絵

913
手島悠介
足をうしなっても主人を助けた盲導犬
がんばれ！ 盲導犬サーブ
講談社 1983
110p 22cm
てしま ゆうすけ

がんばれ！ 盲導犬サーブ

定価880円

昭和58年6月20日 第1刷発行
昭和58年8月8日 第3刷発行

作 者 手島悠介
画 家 清水 勝
装 丁 山田 岬
発行者 山本康雄
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話 東京(03)945-1111（大代表）
振替 東京8-3930
印刷所 図書印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社

© 手島悠介・清水 勝 1983 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-06-200646-4 (0) （児一）

がんばれ！
盲導犬サーブ

手島悠介・文　　清水　勝・絵

講談社

もくじ

1 たずねてきた人……4
2 パピーウォーカーの家で……18
3 盲導犬になるためのくんれん……30
4 目にあたったボール……41
5 サーブ、きょうもありがとう……49
6 あっ、車がくる！……60
7 三本足になったサーブ……77

8 国道に歩道をつけてください……91
あとがき……106

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 たずねてきた人

つゆがはれて、夏のにおいのする光が、きゅうにせいの高くなったひまわりの葉に、ちらちらとかがやいていました。昭和五十二年の、七月のことでした。

その人は、建物にはいるまえに、足をとめて、前庭のほうへやってきました。

前庭では、くんれん士の河西光さんが、ラブラドルリトリバーというしゅるいの犬を、くんれんしていました。そこには、車道・歩道・

交差点・横断歩道がつくられていて、犬は、盲導犬になるための、きそくんれんをうけることができるのでした。

その人は、くんれんのようすを、じっと見つめていました。かみの毛はすっかりまっ白で、着ふるした、チェックのシャツを着ていました。もう、おじいさんとよんでもいいような年に見えました。

河西さんは、その人のことを気がかりに思いました。

（協会に、どんな用できた人だろう？）

ここは、名古屋市の港区にある中部盲導犬協会・盲導犬訓練センターです。

その人が、ほほえんで、話しかけてきました。

「かしこそうな犬ですね。」

河西さんは、「ストップ。」と、犬にめいれいして、たちどまりました。

「くんれんのお仕事も、たいへんですね。この犬は、ラブラドルリトリバーですね。」
その人は、犬の首すじをさすりながら、ことばをつづけました。
「わたしもむかし、犬のくんれんをしていたことがあるんです。戦時中でしたが……。」
（戦時中に犬のくんれん……？）
どんなくんれんだったのだろうと、戦後生まれの河西さんは、ふしぎに思いながら、犬に「すわれ。」のめいれいをだしました。
「じつは、盲導犬になれるかもしれない、シェパードの子がいるんです。うちで生まれた、生後三か月の子どもです。盲導犬になるそしつをもった犬が、なかなかいないことは、わたしも知っています。」
犬を買いとってほしい、という話だったのか、と、河西さんは思い

ました。
「犬を見てみないと、なんともいえませんが……。」
と、河西さんはいいました。ハーネス(胴輪)についたハンドルをにぎられて、ラブラドルリトリバーは、おとなしくおすわりしています。
その人は、めいしをだしながら、
「わかっています。わたしの目で見て、なれるのではないかと思うんです。一度、見にきていただけませんか。つかえるようでしたら、さしあげようと思います。」
「きふしてくださるんですか?」
「ええ。わたしは、商買で犬をかってるわけじゃありませんから……。あなたのお名まえをうかがわせてください。」
「河西といいます。訓練部長です。」

そうこたえてから、河西さんは、その人のめいしを見ました。かたがきはなく、住所は、小牧市になっていて、谷口雅男という名まえでした。

「かたがきがないのは、年金生活者だからですよ。河西さん、じゃ、おまちしています。」

その人は、また犬の首すじをさすって、ほほえみながら、かるく頭をさげて、帰っていきました。

そのうしろすがたが、河西さんの目に、なぜかさびしそうに見えました。

小牧市の町はずれの、小さな家。

そのにわに、金あみをはった犬舎がありました。母犬にじゃれつい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ている、一ぴきのシェパードの子をながめながら、谷口さんは、遠いむかしのことを思いだしていました。

とつぜん、耳もとで鳴る砲声（たいほうをうつ音）、谷口さんは、ひっしになって、シェパードのちひろ号のきずの手当てをしていました。

ちひろ号は、軍用犬で、谷口さんは、軍用犬をあつかう軍犬兵でした。

ちひろ号は、いま中国兵とたたかっている小隊から、「えんぐんをたのむ。」という、たいせつな通信文を、首輪のポケットにいれ、本隊に帰ってきたのでしたが、どこで、流れだまにあたったのでしょうか、血まみれになって、はうようにして、もどってきたのです。

「ちひろ、しっかりするんだ！」

くるしいことも、たのしいことも、分けあってきたちひろ号でした。

そして、かずかずの手がらをたててきたちひろ号でした。

てきのようすをさぐるせっこう犬として、見はりをするほしょう犬として、また、通信文をはこぶ伝令犬として、ほかにも、けがをした兵隊をさがすそうさく犬として、めざましいかつやくをしてきたのでした。

「ちひろ、死ぬんじゃないぞ！」

けれども、ちひろ号は、谷口さんにだかれながら、息たえていき

ました。むなしい戦争でした。むだなちひろ号の死でした。

日本に帰ってきた谷口さんは、犬をかうことをやめました。そんな谷口さんでしたが、会社をたいしょくしてから、一とうのシェパードをかったのです。

ちひろ号にもにた、かしこい犬でした。その犬に子どもができたので、一とうを、盲導犬協会にきふしようと考えたのでした。

二、三日して、協会からやってきた河西さんは、母犬のそばで、あどけない顔をして、かしこまってすわっているその子犬を、じっと見つめていました。

「生後八か月ぐらいにならないと、まだなんともわかりませんが、おとなしくて、りこうそうですね」。

「子どもは、六ぴき生まれたんです。そのなかで、いちばんかしこそうな子を、のこしておいたんですよ。わたしの年では、もうこの子のめんどうまでみられません。めすです。気にいっていただけたようですね。」

と、谷口さんはいいながら、子犬を手にとって、河西さんにわたしました。母犬は、知らない人に自分の子どもをだかれて、不安そうでしたが、じっとがまんをしています。

「よしよし、いい子だ、いい子だ。母親も、しっかりしたいい犬ですね。それで、この子の名まえは？」

と、河西さんはききました。

「まだつけてませんが、サーブというのはどうです？　目のふじゆうな人『のためにはたらく』、『主人につかえる』といういみで、サーブ

です。
河西さんはうなずいて、
「サーブ、ちょっと歩いてごらん。」
と、子犬を下におろし、よちよち歩くようすを、ながめました。
「河西さん、あなたもくんれん士として、たいしたもんですね。母親犬は、あなたをこわがってはいないし、もう、けいかい心を、すっかりといたようですよ。」
河西さんは、ちょっとわらってから、子犬を犬舎にもどし、思いだしたようにいいました。
「谷口さんは先日、戦時中に犬のくんれんをしてらしたとか、おっしゃってましたが、軍用犬ですか？」
「ええ、そうです。中国大陸で、軍用犬をつかっていたんです。軍犬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com